

象とした地域以外の墓を対象とすることで、より広範囲な比較を行いたい。

参考文献

- ・ Kuraszewicz, K. O. 2006 "More Remarks on Late Old Kingdom Mastabas West of the Step Pyramid", *Polish Archaeology in the Mediterranean Reports XVIII*
- ・ Reisner, G. A. 1942 *A History of the Giza necropolis*, Cambridge, Harvard
- ・ Malek, J. 2000 "The Old Kingdom", ed. Shaw, I. *The Oxford History Of Ancient Egypt*, pp.83-107, Oxford.
- ・ Snape, S. 2006 *Ancient Egyptian Tombs: The Culture of Life and Death*, Oxford

GIS・GPRを用いた前方後円墳の研究

— 武射国造領域における大型墳の展開 —

今城 未知

はじめに

前方後円墳は古墳時代の開始から終焉まで築造される当該期を代表する墳墓形式である。前方後円墳の墳丘規格や設計原理は一九七〇年代から様々な議論がなされてきた。そして全国各地に大王墓と

の相似墳が認められるようになると、前方後円墳の規格・設計原理の研究は古墳時代の社会構造を理解するための分野として発展を遂げてきた。近年、航空レーザー測量やGPR探査などの技術を用いた調査方法が導入され、墳丘規格研究においてもデジタル技術を用いた研究が見られるようになった。一方で墳丘規格に焦点を当てた地方の首長墳系列の把握が遅れた点や、墳丘の復原やその精度に差異が見られる点については今日でも課題として挙げられる。本研究は古墳時代後期から終末期の武射国造領域の大型墳を対象として、GPR探査を用いた墳丘の復原を行い、当該地域の首長墳系列の整理を目的とする。

1. 分析対象と方法

本研究の分析対象となるのは武射国造領域（現在の山武郡域）の大型前方後円墳である。具体的には殿塚古墳・姫塚古墳・小池大塚古墳・旭ノ岡古墳・大堤権現塚古墳・不動塚古墳・西ノ台古墳である。また既に同型墳の指摘がある高田二号墳・人形塚古墳（千葉市）についても改めて分析する。分析方法はまず、現地踏査・測量・GPR探査を実施し、墳丘・周溝の復原を行う。全ての古墳に対して測量・GPR探査が実施できたわけではないが、既に測量・GPR探査が実施されている古墳のほかに、今回新たに旭ノ岡・大堤権現塚についてはGPR探査を実施した。次に同型墳の抽出を行い同型墳の中での立面形の差異を分析する。そして墳丘の外形や立面形・周溝形態を比較し、系列理解できるのであれば系列として整

理する。

二、墳丘・周溝の比較

分析の結果、殿塚・旭ノ岡・高田二号・人形塚は外形同型墳である点が確認できた。外形同型墳とは、テラス面の広さや段築構造が異なる場合でも墳丘の外形が同型である墳丘を指す。外形同型としたのは、墳丘毎で立面構造に明確な差異が見られ、立面構造の差異が埴輪や埋葬施設などの諸要素が影響していると考えられるためである。また西ノ台・不動塚・大堤権現塚は墳丘の外形は異なるものの、外形殿塚型と比べて前方部が細長く墳頂平坦面は後円部から前方部へ長く細長いスロープとなっており、鞍部が後円部付近に位置しているという共通点がある。周溝は殿塚・姫塚・高田二号・人形塚は長方形二重周溝、西ノ台・旭ノ岡・大堤権現塚は馬蹄形に近い盾形周溝、不動塚は前方後円形周溝を呈する。

三、武射国造領域における大型墳の展開

まず木戸川上流域に展開する殿塚系列がある。外形殿塚型である四古墳のうち、首長墓と考えられるのは殿塚古墳・旭ノ岡古墳である。旭ノ岡古墳は殿塚古墳より新しいと考えられるが、盾形周溝を有し木戸川下流域に築造されている。殿塚系列に続くと考えられるのは殿塚に隣接して築造され、長方形周溝を有している姫塚と考えられるのが妥当である。姫塚は殿塚とは異なる外形だが、斜面地という地形の制約による立面構造の調整が見られる。墳丘長は殿塚・姫塚Ⅱ3・2であり、墳丘長の規制が存在する上での地形の制約がもた

らす外形の変化が考えられる。そして殿塚系列の最後の前方後円墳として小池大塚が挙げられる。小池大塚は前方部幅が広く後円部径に匹敵する墳丘の可能性もある。殿塚に類似する特徴である。また殿塚・姫塚に近い場所に所在している点からも殿塚系列に属すると考えられる。次に作田川流域に展開する西ノ台系列がある。西ノ台からはじまり、不動塚への流れが考えられる。ここで問題となるのは木戸川下流域に所在する大堤権現塚の位置づけである。これまで当該地域に築造された古墳とは一線を画す墳丘規模と三重周溝を持つ。しかし墳丘形態が西ノ台系列に類似し、前方部側面が矢羽形を呈する点が殿塚と類似する。大堤権現塚築造の段階で殿塚系列と西ノ台系列の統合が図られた可能性を指摘する。大堤権現塚に後出して木戸川上流域には大塚姫塚、作田川流域には駄ノ塚が築造される。大型円墳と大型方墳という対比から殿塚系列と西ノ台系列への再分裂を考える。その後当該地域では、作田川流域に初期寺院と郡衙が築かれ、作田川流域の優位性が高まっていく。

おわりに

測量図や現地での観察に加えGPR探査を行ったことで、より蓋然性の高い墳丘の復原が行えた。今後はより復原の精度を高めるためにGISとGPR探査の融合が課題となる。また、方法論を確立させた後に対象地域を関東全域に広げて、古墳時代後期から終末期にかけての墳丘の系列と首長層の動向を明らかにしていきたい。